
GANTZ ~二つの引金~

スタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GANTZ ～二つの引金～

【Nコード】

N0630J

【作者名】

スダ

【あらすじ】

僕の存在に意味がなくなったあの日から、僕は自分に意味を与えてくれるモノを待っている。私は何よりも不器用だけれども、人を理解する事を諦めたくはない。それはいつだって同じなの。ガントツで交わる二人の運命

ブログ 意味と無意味（前書き）

更新、

遅いですけど、

頑張ります。

ブログ 意味と無意味

生きてる事に、意味があると思う？

それはどんなに考えたって答がでることではない。

どんなに素晴らしい人だって、一瞬で死んでしまっし、いかに汚い人間であっても醜く生き残ることもある。

どんなに頑張っても報われない事もあれば、狡猾に手柄をさらってゆく人だっている。

そんな世の中に意味があると思える？

ガンツは僕に教えてくれる。

この世界には意味なんかないと言っことを。

意味が無いからこそ自由であり、意味が無いものが無敵でいられる世界。

それがガンツ。

僕の生きる世界なんだ。

一 射目 最初の交差点（前書き）

今更ガンツですが、よろしく願いします。

「22年4月21日、内容を再編集」

一射目 最初の交差点

どうも。管理人です（^^）

いつも、見てる人ありがとう（いたただけど）。

またミッションがあつたから更新します。今回も生き残った。あんまし強くは無かったよ。点数もそれなり。

では、しばしガンツの世界をお楽しみ下さい。

夜の冷えた空気の上に、人が立体で描き出されてゆく。

そんな光景を眺めながら僕こと佐野春彦は、今描き出されている女性をどうやって生き残らせようか考えている所だ。

知ってる人もいるかもしれないけど、今から行われるのは星人達との戦争（抗争？）。

僕らガンツの奴隷は、毎回なんともシニールな生き物と殺し合う義務があり、無駄にならなかった人生を別の無駄なことにつぎ込む権利をもつ。

今回の相手はタヌキ星人。画像では置物のタヌキみたいな奴らしく、特徴は金玉でかすぎ。口癖は「うどん…」とのことだ。自分で言うていて恥ずかしくなる。

「佐野さん…」

光線によって描き出され彼女がオドオドと話しかけてくる。

名前は白井綾（あや）と言うらしい。久しぶりの新人だ。もちろんスーツは着ている（一応教えてみた）。

こんな異常なシチュエーション。

挙動不審はしょうがないにしても、ずいぶんひ弱なイメージだ。こういう子犬みたいな感じの子はあまりタイプじゃない。まあ今は関係ないけども。

「えーと。何から教えたらいいかな。」

「あの、ここは…」まずは場所からの説明。新人への説明は死ぬほどめんどくさい。その多くは説明しても信じない、または思考停止になるだけ。

だって僕の言葉に真実はないんだし、この世界には推定しかありえないのだから。

「ここは、夜の太宰府市だよ。僕の住んでる所の近く。でも帰っちゃいけない。エリアからでると、頭がぶっ飛んで死ぬ事になってるから。」

「死ぬ!?!」

「うん。説明すんのめんどいけど。君も一度は死んでるからわかるよね。次は助からないからさ。」

前にも言ったかも知れど、ここには死んだ人間が集められる。特に死に方に区別はない。無傷でもバラバラでも、ガンツに選ばれたら部屋に送られる。一体それは何故なのか。北欧神話的なニュアンスなのか？はたまた単に人間のリサイクルなのか？（僕はこっちだと思っけど）

まあ解ることはないだろう。

彼女はどんな死にかたをしたんだろう。僕は毒ガス自殺に巻き込ま

れた。

「撮影か、なにかじゃないんですか？」

「うん。僕たちは一般人には見えないようになってる。おっ！もう10分近く過ぎてる。悪いけど時間がないから、次の説明いつてもいいかな？詳しい事は後で説明するからさ。（君が生き残れたらだけだね）」

「…はい」

手首から外した端末を彼女に渡す。とりあえずコレを使えば生き残れる筈だ。

「じゃあ次はコレ。このポケベル見たいなの。僕はナビつてよんでる。

レーダーみたいな物で、これを見ればターゲットの位置がわかるんだよ。あつ、この四角いのがさつき教えたエリアね。」

画面内の四角の中には僕と彼女以外に無数の光点がある。今回は結構多い。百点いけるかも知れない。

「この四角から出ちゃったら…死んでしまっんですね。」

「そうそう。時間がないから、はしよるけど、これを手首に付けて、このボタン押して貰える？」

「…はい。」

ジジジッ

彼女の体は、溶けると言うよりかは滲むような感じで背景と合わさ

った。端的に言えば消えた。コレがナビの機能。テクノロジー的には破綻してるはずの理論だ。

「あの。これでいいんですか？」

「うん。分かんないと思うけど、君の姿が消えてるんだ。」

「はっ!？」

「周波数を変えてるらしい。まあ詳しい事はわからない。とりあえず、大体の敵からは見えなくなってるから、じっとしてさえいれば、多分生き残れると思う。後はレーダーで敵の居場所を教えてよ。戦闘は僕がするからさ。」

「…わかり…ました。」

ドスン。

背後からの音に、きだるげだった僕の場合は研ぎ澄まされる。振り向くと予想通りの相手、タヌキがいる。星人だ。

「あつ！佐野さん！敵が近くにいます！レーダーに!!！」

…知ってるよ。目の前にいるじゃん。この子、天然なのかな。

「あんまし声がでかいと居場所が分かるから、静かにね。」「はい…」

腰のホルスターから 刀の柄を抜く、ボタンを押すと刃が延びてくる。ヘンテコで残虐な武器だ。

「屋根上にもいてね。巻き込まれるから。そのスーツ着てれば高く跳べるよ。せーので跳んで。」

「あつ、はい…」

僕、彼女、狸の順番に静寂が走っていくのを感じた。このはりつめてゆく空気を吸うのが僕は好きだ。僕の意味が少しだけ芽吹く。

「せーのっ！」

彼女のジャンプ音と共にタヌキが突っ込んでくる。スピードはまあまあな感じ。

「うどん…！」

気の抜ける掛け声と共に、豪快な右ストレート。だが豪快過ぎるため脇腹があいている。

僕はタヌキのパンチを利用し、右腕に刀を振り上げる。重い手ごたえと共に、タヌキの腕が宙に浮く。

「うどっ、があああ！」

ふくらはぎ辺りから豪快に血を吹き出して、転がり始めるタヌキ。もう終わり？ なんだかずいぶんと弱い。念のため、三又の銃を狸に向ける。

バシユ。

三叉の銃と言っても想像しにくいと思う。でも仕方ない、三叉なのだから。先から発射した三角形のレーザーアンカーがあつという間にタヌキを縛り上げ、地面に打ち付ける。つまり捕獲用の銃なのだ。敵を縛り上げて転送（何処に？）するための…

「おーい！聞こえてる！？」

屋根の上から今の惨劇を見ていたと思われる彼女に対して、声を掛ける。

「分かったと思うけど、今日からこんな事しないといけないから。よろしく。」返事がない。多分吐いてるんだろ。信じたくないことは一杯ある。一番認めたくないのはこの惨劇に自分が加わると言うことだろう。

「ふう。」

カチッ

引金と共に天から降ってきた光。それが血まみれのタヌキをスラッ分解していくのを眺め、僕は晩御飯はうどんにしようかと、ぼんやり考えていた。

二射目 異世界への一歩（前書き）

「2022年4月25日、内容を再編集」

二射目 異世界への一步

世界にはプライバシーという言葉がある。

そして私にはプライバシーを守られる権利がある…はずである。

「佐野さん。実名は…酷いよ」

あの日から3日、私は家のパソコンの前でポツリと呟いていた。
理由はコレ。

今、見ているブログの登場人物として、私の実名、白井 綾の名が
バッチリと使われていることについてである。
もちろん被害はそれだけでは済まない。

私に対する考察の中に天然だとか、タイプじゃないだとかの毒舌を
しっかり頂いている。

佐野春彦。

あの人最悪だ。

人生には楽が有れば苦もあるらしいけれど、私には死があった。三
日前の事だ。

あの朝、ホームで電車を待っていた。別に珍しいことじゃない。線
路に落ちてしまったこと以外は。通過電車が、あまりにもあつとい
う間にやって来たので、私は悲鳴一つあげる暇がなかった。

意識が戻ったのは、部屋の中。既に夕陽は沈み掛けていて、「よか
った夢だった!」と私は安心した。

ただど何かが違った。部屋の構造、インテリア。どう考えても、ここは私の部屋じゃなかった。

だって私の部屋にはこんな黒い玉の置物なんかないし、その横にたっている全身タイツの変態彼氏なんていないのだ。

夢が覚めてないのだと思った。いや、もしかしたら今、現在も私は夢の中にいるんじゃないだろうか？今日までの全てが夢。もしそうならどれだけ幸せなのだろうか。もしそうなら…

佐野春彦と名乗った彼は、どういうわけか、私にもタイツの着用を促した。なんだか生き残る為には必要な事らしい。

受け取った変態セットを玄関先で一通り着てみた所。

これは、なにかのプレイを強要されているかとも思ったので、玄関から逃げようとした。だがドアノブが何故か掴めない。

「こんな夢をみるなんて私、変態癖があつたのか…」と悩んでいた所、突然目の前の光景が変わり、私は裸同然のスーツ姿のまま、住宅街に立っていた。

恥ずかしい。

そこから先の内容は既にこのブログに書いてある。

それは次々と現れるタヌキのお化けを佐野さんが一人でバシバシと倒していくといった内容。飛び散る血飛沫と内臓は、ドラマのそれよりもずっと綺麗で、ずっと気持ち悪くて、私は何度も何度も吐いた。戦いが終わった後、気づくとまた最初の部屋に戻されていた。

佐野さんによると、黒い玉はガンツと言らしい。

戦いに勝てば、倒した星人に応じて点数が貰えるんだそうだ。頭の悪い私でも思いつかないような馬鹿らしい発想。

最初の評価は、「さの」で12点。トータル89点と出ていた。次は「あやや」で0点。

隠れすぎ。ゲロ吐きすぎ。と書かれていた。私の事らしい。とてもイラッときたけれど、我慢した。

零点だと色々が悪口を書かれるらしいのだ。

機械の癖に嫌なヤツだと思う。

そう言えばガンツは見た感じ機械みたいだが、中には人間が入ってる。小さな女の子だ。

年は10歳前後といった所、眠っているようだが、体に繋がれたケーブルが痛々しい。一体誰がこんな事を考えたのか。そして一体いつからこの子はここにいるんだろうか？

その日の帰り際に佐野さんが

「詳しく知りたかったら『黒い玉』でインターネットを調べればいい。」

と教えてくれたので自宅のパソコンで調べてみた所、今に至る。

黒い玉についてのサイトは以外な位多かったが、まさか佐野さん自身のサイトがあるなんて。一般人に喋ったら死ぬんじゃないの？

ブログを遡っていくと、佐野さんは一年近く前からガンツで戦っているみたいだった。油揚げ星人。ドラ。エ星人など、アホらしい名前がでてくる。きつと他人には半分受け狙いのフィクション小説としか映らない。けど私にはわかる。それが事実であることが。

読んでいくと時々、新人の名が書かれている。私の前の戦いでは男性が二人、スーツを着ず、結局すぐに殺されている。

佐野さんの仲間の死についての記述には感情が一切込められていない。私が死んでもこんな風に書かれるのだろうか？

それは、なんだか怖いと言うよりも寂しい気がする。

私は佐野さんのサイトに向けてメールを送ることにした。

あの日から3日経った今、あれが夢だったとはどうしても思えない。それほど鮮明で、醜悪な体験だった。そして私は偶々生き延びただけ。

これから私が生き残るためには、彼からそれを学ぶしかないのだ。たとえ彼がどんなに危険な人間だったとしても……だ。

『白井です。ガッツの事について教えて頂きたい事があります。今週の日曜日、。。。駅に来てください。お願いします。』

彼は来てくれるだろうか？

三射目 ガンツ（前書き）

「22年5月2日、内容を再編集」

三射目 ガンツ

人と待ち合わせるなんて、随分久しぶりだ。駅は強めの雨のせいで人もまばらだが、きつと彼女はくるのだろう。

彼女にどの様な意図があるにせよ、明確に生き残ろうとするタイプは久しぶりだ。大概は現実に翻弄される内に脳髄破裂が星人に殺されるからだ。生き残るためには適応力が試される。非日常への適応だ。

5分後、白井さんと合流。近くのファミレスで話をする事になった。関係ないが、まともな食事とコーヒーは久しぶりだ。勿論タダというわけではないだろうけどね。

「あの…今日はありがとうございます」

「うん…まあ特にやることもないしね。」

会話終了…なんか気まずい。白井さんはともかく、僕にいたっては人と話すこと自体が久しぶりなのだ。どうしよう。

「僕には…戸籍がない。」

「えっ？」

呆ける彼女に説明を続ける。無関係にみえて、ある意味、一番重要な話かも知れない。

「ある事情で戸籍がない。だから、まともな仕事にはつけないんだ。食料とかは周波数を変えて何とかしてる（盗んでる）。普段はガン

ツの訓練とかをしてる。だから基本的に僕は暇。以上です。」

「はあ。それは、またお呼びしてもいいって事ですか？」

微妙に違う。あんまり呼ばれるのは困る。

「忘れて下さい…とりあえず何か聞きたい事があるんですよね。」

この話は流す事にして、彼女の質問に答えてさっさと帰るか（そもそも、僕は何を言ってるんだろう？）。

「あつ、はい。えっと、じゃあ…ガンツって何なんでしょうか？」

いきなりの直球。まあ当たり前か。始めの頃は僕もそうだった。

「ガンツが何なのかは僕も知らない。何のためにあるのかも。けど多分ですが、ガンツに意味なんてものはありません。」

「えっ…と。どういうことですか？」

「例えば、僕達は正義の味方ではないし、逆に悪者と言うわけでもありません。星人が何なのか。僕が使っていた武器が何なのか。ガンツが何なのかは誰にもわかりません。ガンツにあるのはルールと戦闘。その二つです」

「ルール？」

「そうです。正義も、悪も、生き残りたいと思ふのなら、ガンツのルールを守る必要があります。」

「それは…どんなことですか？」

「まず、原則として戦わないと死にます。制限時間内に星人を殲滅する事が第一のルールです」

「星人は必ず殺さないといけないんですか？」

「星人と私達は敵対関係にあります。奴らは私達を殺しにきます。殺らなければ此方が殺られるだけです。殺さない銃も一応ありますかね」

「戦わないと…死ぬ」

「次にガンツの内容を一般人に話さないというのがルールです。話すと死にます。正確に言えば、ガンツを信じるような確証を与えた場合と言うべきかな」

仮に事実を暴露したとしても、サイト等の信憑性の低い情報なら、許される場合もあります。

とはいえ、ガンツのルールはガンツの意思に左右されている可能性があります。なので、ガンツが気に入らないと感じる事は極力しないことですね。」

「はあ。」

「後は武器ですかね。武器は原則として共通です。でもスーツは違います。自分のスーツを着ないと、僕が戦った時のような効果はありません。あの後、スーツはどうしました？」

「えっと、ケースに入れて直しました。」

「じゃあ大丈夫だ。予備がないので、持ち帰る時は常に身につけていてください。」

「…ガンツというのは、あの中の子供なのですか？」

「今の所はなんとも…ただ、あの子供は生きてますし、頭を撫でると微かに反応を示します。此方の要求を聞くこともあります。僕が入手した情報では、中身が大人の物もあるらしいですけどね。」

「そうですか…」

彼女の啞然とした表情から考えて、おそらくは今言った半分も理解できてはいないんだろうけど。

まあ初めはそんなもんだ。知れば知るほど、事態は複雑化して沈んで行く。

こういうときに順応性の高いヤツの方がかえって危ないとも言える。彼女はノーマル。まあ普通の人間から死んでいくんだ。

「なにか他に聞きたい事はありますか？」

あまり他人に確信的な情報を渡すのは危険だ。言つべき事を言ったなら、今日はそろそろ帰りたい。

「えっと…私はあの日どうなったのですか？」

「え？」

まだ帰れないようだ。

見かけによらず、結構な理解力がある。探求心も低くない。鍛えれば使えるタイプか。まだはつきりとは言えない。

「なんですか？」

「私はあの日、電車で轢かれて死んだと思います。でも、今でも実際にはこうして生きている。私は、私は何なのですか？ホントに生き返った……んですか？」

なるほど、よい質問。ただ、その質問は答えづらい。

「……僕の話しましょう。そうすれば、分かりやすいかも知れないから。」

貴方は轢死のようですが、僕の死にかたはとても呆気なかった。

あの日、飛び魚になる夢を見ていて、目が覚めたら、部屋にいました。ただそれだけ、何にも分からないまま、部屋に突っ立っていた。そこからは前回のアナタの様に右往左往している間にミッションが終了。

ガンツに零点を貰った後、今が夢か現実かも分からないまま、帰路につきました。

「……」

現実を再認識したのは帰宅した時でした。アパートの前に警察車両が並んでいたんです。野次馬に聞くと、僕の部屋の隣で男がガス自殺を図ったそうだとのこと。

つまり僕はそれに巻き込まれたわけなんです。しかし本当に残酷な現実はその後でした。

野次馬は言っただけです。

『なににせよ、死者が出なくて良かった。』と

「えっ？」

僕は生きていました。病院に運ばれて一命をとりとめた。だが、ガンツは僕を死んだと見なして、見切り発車で、僕を再生してしまっ
た。

結果として僕は二人存在する。病院で治療を受ける僕と、ガンツに複製された僕。

僕は佐野としての意味を無くし、社会から切り捨てられました。本人の方は今も大学生活を続けているのでしよう。

「そんなことって…」

「ガンツの中において、『あり得ない』は通用しません。あらゆる仮想が現実として具現化されているでしょう？僕も貴方も現実化された仮想に過ぎない」

「…嘘ですよ…」

「とにかく結論を言いましょう。白井綾は電車に轢かれて死んだ。貴方は白井綾本人ではありません。バラバラになった方は、恐らくガンツに回収されているんです。貴方はもう一度、一から新しく作り直されたコピーなんですよ」

四射目 くそガッツ(前書き)

「22年5月2日、内容を再編集」

四射目 くそガンツ

「本当だ。よく見たら、肘の傷跡も消えてるじゃん。ラッキー！……って、最悪だよ……」

チャプン

綺麗になった肘を湯船に沈める。

ガンツにコピーされると、古い傷跡なんかもなくなつた状態で再生されるそうだ。

入浴剤で蒼く染まつたお湯が、私の気持ちを少しだけ慰めてくれた。休日の入浴は私の最大の楽しみの一つ、でも、今夜はそんな愉快にもなれない。

「どうしよう。」

ガンツで戦う事が生き残る条件。

そのための武器、スーツ、敵の星人。

他人に話せば死。相談も出来ない。頭が破裂しなくなつて、きっと病院を紹介されるにちがいない。

極めつけは、私が白井綾のコピーだということ。

「一から作り出されたもの」

佐野さんの言葉が耳を離れない。

じゃあ私はなんなのよ！？生きてるのに。今の私は私じゃない？

「聞かなきゃ良かった。もう最悪だよ。絶対死ぬよ。」

前回は隠れる事で生き残れた。たまたまだ。それだけではいつか死ぬ事になる。いつかって何時？一週間後？明日？それとも今？

「ハア…ハア」

自分が息をしていないのにきづく、過呼吸ってやつ？これが本物の不安。今まで知らなかったもの。

ゾクゾクッ

先日のタヌキ星人の残骸を想像して、鳥肌がたった。あんな風になつて私も死ぬのかな。嫌だよバラバラなんて。一度はなってるんだろうけど。

「佐野さん…助けてくれるかな」

どうなんだろう。あの人、なんかおかしいもんな。悪人じゃないんだろうけど、善人でも無さそうだよ。きつと見捨てられるよ。

「はあ。」

温もった空気で深呼吸をする。落ち込んだときの私の癖。

「佐野さんは凄いな。一人で戦い続けるなんて。」

独り。

考えて見れば、佐野さんは独りだ。家族も友人も、戸籍も財産も権利も、全部を一辺に無くしているのに、あんなに強い。いや無くしてるから、あんなに強いのか。佐野さんの目は光らない。ずっと曇ってる。出会ったときも、タヌキ星人を殺してる時も、ファミレスにいるときだってそう。ガンツ以外は何にもない。なんだか切ない気さえしてくる。

私はまだ、社会での生活が残っているんだ。家族や友人とだって会

える。仕事だつてできる。
生き残りさえすれば…

「生き残らなきゃ…絶対、死ねないよ…よしっ！」

掛け声と共に、私はザバツと浴槽から飛び上が…れなかった。

「あれ？」

突然の金縛り。

立ち上がることが出来ない。

「なにこれ。湯あたり？ちょっと。」

パツ

「えっ！？」

視界が切り替わり、あの黒い塊がまた、私の目に映り込んだ。

「ガンツ…」

黒い玉の部屋、私は裸のままでガンツに呼ばれてしまった。　しか
も、周囲には五人近くの人がいるではないか。

皆、口をポカンとあけて此方を見ている。

座ったままの私。

涙がじんわりと登ってきた。

「最悪すぎる」

もうお嫁にいけないよ…

くそガンツ。

五射目 病多き年頃（前書き）

2010年 5月19日 差し込み投稿

五射目 病多き年頃

中二病って言葉がある。中学二年生頃の子どもにありがちな、達観的で反抗的な非現実的な思考のことらしいけれど、実際の中2の私には解らないことが多すぎる。

何が本当なのか？

何が間違っているのかも。

「由可利、ご飯よ」

毎朝、部屋から出ると、母が笑顔で寄ってくる。何がそんなに可笑しいのか。それとも、笑うことが大好きな何とか神様のお言葉なのか。私には分からないけれど。

「いない。」

私にわかるのは、三人での食事なんか耐えられるはずがないということ。

「今日はパパもいるんだから、食べていきなさいよ」

「日直なの…放っておいて。」

母のおでこに一瞬だけ醜いしわが走る。が、それもすぐに笑顔に飲み込まれていった。

「…そう。行つてらっしゃい。」

「…行つてきます」

言いたい事は言えはいいのに。
でもそれは私にも言えること…

「なんだ。もう行くのか」

玄関で靴をはいていると、今度は父がトイレから出てくる。

「パパは今日休みなんだ。三人でどっか行くか？」

母と同様に笑顔で話しかけてくる父。

何がそんなに嬉しいのか？あまりの能天気ぶりに、つい怒りが口から飛び出した。

「私に構ってていいの？エリナちゃんを放っておいて。」

「な！？」

予想外の解答に度肝を抜かれたのか、急に喋らなくなる父。男はバ力。

母ですら知っていることを、私が知らないとも思っているのだから

「今日、部活だから」

「あつ！待ってくれ由可…」

ガチャン

玄関をでて息を吸う。

こんな排気臭い空気でも、家の中よりはずっと新鮮に私の肺を満たす。嘘で汚れきった空気を深呼吸で吐き出すのだ。

父が追いかけて来ないうちにエレベーターに乗る。どうせ本気で追いかける気はないだろう。誰も向かい合う気なんかないんだ。私の家が特別なのか。あるいは…

〈学校〉

チャイムがなれば、授業が始まる。

授業が始まれば先生が喋る。

そのことには異論も反論もない。

けど、林檎の生産量も、 x 、 y の方程式も、私の悩みを解決することはできない。

先生の声を聞きながら、私はボンヤリと思考を続けた。

私は恵まれている。 (どうして?)

おいしいご飯も食べられる。

(それだけ?)

毎日お風呂にも入れる。

(他には?)

寝るところだってある。

（だから？）

家族もいる。

（ホントに？）

交流もある。

（嘘だけどね）

学校にもいける。

（役にはたたないよね？）

私は恵まれている。

（でも何かが足りない）

私は幸せな筈。

（でも何かが歪んでいる）

何かが納得できない

（それはなに？）

何が嘘なの？

父がエリナちゃん（母とは正反対のバカそうでケバい女）と会うようになって、母はご都合主義極まりない新興宗教に何百万もの寄付を繰り返す。それでも私達が三人で暮らしているのは何故なのか

？

中2の私には解らないことが多すぎる。
(わからない事にしてるんでしょ?)

放課後、わざと教室に残って時間を潰す。

「ユカリン聞いてよ。正ちゃんったらさ」

今しゃべっているのは、クラスメートの利恵子。よく喋る明るい子で、最近では大学生の彼氏のノロケをたっぷりと聞かせてくれる。それでも彼女の事は嫌いじゃない。

「それでね！正ちゃんがね…」

「私って中二病なのかな？」

「え？」うつかり考えていたことを口走ってしまった。
利恵子も私の唐突な質問にキョトンとしている。

「…ゴメン。今の無し。」

「びっくりしたあ。ユカリンあんまり自分のこと話さないからさ。」

「うん…ちよつとね」

「ユカリンは中二病じゃないよ。そうゆうのは三組の藤山みたいな奴をいうんだし。ユカリンはどっちかって言うとクール…って感じ

じゃないかな？私がかっこいいと思う。」

「そう。」

思っていたよりも真面目な答えに、私はちょっとだけ安心した。

日も大分落ちてきたので、利恵子と一緒に帰ることにした。

「ねえ。今度、正ちゃんの友達を紹介しようか？」

「？」

彼女から誘われるのは初めてだ。私は彼女の話の聞くだけで、プライベートな付き合いはない。

それが、何となしの暗黙の了解になっていたから。

「なんかユカリン悩んでるみたいだし。彼氏じゃなくても男の人とかにも相談してみなよ。」

「……」

正直な所、男にだけは頼りたくなかった。彼氏なんか欲しくはなかったし、付き合い方だって。

「えっ、えっと嫌ならいいんだよ。ちょっと試ってみただけなの。」

「会ってもいいよ。私でいいなら……」

パアッと利恵子の顔が明るくなった。

眩しい様な笑顔。それは何だか私の――

「ホントに！？ユカリン可愛いから絶対上手くいくよ」
まだ付き合うとまでは言ってないのだけれど…

パッパッ！

「あっ！正ちゃんだ。」

クラクションの音に振り向くと、みつ子が大きく反応する。どうやらアレが彼氏らしい。言っでは悪いがチャラそうなタイプだ。

「ユカリン、日にち決まったらメールするからね！」

車道の方に走っていく利恵子。

「あっ、うん」

なんでOKしたのか。車に乗り込む彼女を眺めながら軽く後悔した。私は疲れているのかも知れない。けれど彼女が笑った時、何かが解った気がしたような

「ふう…」

とにかく帰ろう。本当に疲れてしまったようだ。利恵子達の後方、走ってくるダンパーがユラユラと大きく揺れて見えるのだから。

五射目 病多き年頃（後書き）

えっと、いろいろと改編しながらやっております（・・）

更新遅くてスマセン

六射目 向こう側の人間 さらに向こう側の…

「いやっ！」

部屋の隅に逃げ込む全裸女と、それを追う男。裸で逃げる女の姿を男達はチラチラとうかがつい、女達は恐怖に息を止めた様に動かない。女を追う大柄の男は、スキンヘッドに白スーツの明らかなヤクザだ。

「やめてっつていつてるでしょ！」

「うるせえ！」

ああ、なんでこんな事になったのか。わかることは、これが夢では無いことだけ。目の前の裸の女性は、ヤクザに強姦されようとしているんだ。

俺は名は松原^{マツバラ}陸^{リク}。さっきまでこのチンピラにボコされていた哀れなピザ配達員だ。

理由は、俺がうっかりコイツの車に配達用バイクで突っ込みまっただから。衝突の瞬間、絶対死んだと思った俺は、気づいたら何故かコイツと一緒に、この部屋にいたんだ。

ヤクザはしばらくは何が起こったのかを調べていたが、俺が事故の張本人と分かると容赦のない制裁を浴びせた。

しかし、幸か不幸か突然と裸の女が部屋に現れ、ヤクザの興味は俺から女に移った。

「止めて！警察呼ぶわよ！」

「サツが怖くてヤクザやれるか！」

「くっ、最悪！」

女性も外見に似合わず、必死の抵抗を見せているが、なにしろ本当の丸腰だし、狭い部屋では直ぐに追い詰められてしまう。

チンピラの暴拳を止める者はいない。この部屋には男が三人、女が二人いるが皆、何もできない。現状すら把握できないんだ。

俺が止めなければ…しかし、散々に殴られた俺の顔は鈍く唸り、痛みを滲み出している。俺では止められない。俺では…じゃあ誰が？

「いい加減に…してよ！」

ガリッ

「ぐわっ！」

女の爪がヤクザの瞼の肉をかぎとった。咄嗟に目を覆う男から必死で逃げる女。

しかし彼女の髪を握りしめるゴツい手の平が、それを許さなかった。

「いた…い。離して…」

ヤクザの顔は性欲からくる汚い笑みが消え、血走った目が怒りに燃えていた。

状況は最悪だ。

ゴスッ！

「あくっ！……」

ドスンッ！

ヤクザの右の拳が女の腹を打ち上げる。

崩れ落ち、おう吐する女。

「いい度胸してんな…殺してやろうか？クソアマがああ！」

「かはっ…うつ、あっ」

女の綺麗な肌を足蹴にした後、チンピラは懷から拳銃を抜いて、女に向けて振りかざす。

それまで固まっていた連中も拳銃の登場に悲鳴を上げた。

「うるせえ！撃たれてえのか！？」

完全に興奮しきっているチンピラ。今の彼ならどんな理由で発砲してもおかしくない。

「極道舐めたらどうなるか。体に教えてやるわ。」

チンピラの表情は、女を黙らせた征服感とこれから強要する行為に対する妄想によって歪み切っていた。

駄目だ。止めなくては。だが止めたら確実に撃たれるだろう。神様、どうにかしてくれよ。もう、俺は足が震えて動かない。

ギョーン！

「えっ？」

「あっ？」

何の音だ。今まで聞いたことのないなんだか気の抜けた音が部屋に響いた。

チンピラの後ろにはいつの間に来たのか男が一人。髪は短く、細目だが恐ろしい目付き、よれたパーカーと細身のジーンズ。手には銃の様な何かを握っている。先ほどの音と光は、この銃（？）から出たようだ。

「てめえ、なんだ？その玩具は。」

チンピラは呆れ返った顔で男を問い詰める。
死ぬぞコイツ。こんなときに何ふざけてんだ。

「さようなら」

男は完全な無表情でチンピラに別れを告げた。
チンピラは額に青筋を浮かべ、拳銃を男に突きつける。

「上等だ！クソ餓鬼！死に、ざら、べっ！」
バチュ！

一瞬、顔の形が歪んだかと思うと、ヤクザの顔が破裂した。あまりにも見事な破裂であったので、俺はヤクザの怒りが脳天を突き破ってしまったのかと本気で思ってしまった。

奴のスーツが真っ赤に染まる。

飛び散る血、肉、骨　は俺が立っている位置まで届く。パシャパシヤとフローリングをうつ血液が霧となり鉄の香りを俺達に運んだ

「うつ……」

「うわあゝ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「いやゝ――っ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

今や完全に現実引き戻された周りの奴らは、惨劇から少しでも離れようと、後ろに下がっていく。

頭においてけぼりにされた胴体は、二三度痙攣すると、パツタリと横に倒れた。それでも首からはドクドクと朱が溢れてきた。

「うつえ……」

俺は沸き上がる吐瀉物を吹き出しながら、その場に膝まづいく。頭は貧血を起こしかけているのか、クラクラと落ち着かない。

「もう嫌だ。一秒でも早く帰りたい。こんな所には居たくない。」

「佐……野さん……」

朦朧とした表情を浮かべ、裸の女が男のズボンの裾を掴んでいた。

阿鼻叫喚の地獄の中、佐野と呼ばれた男は只、静かに女を見下ろしていた。

彼の表情のない虚ろな瞳には彼女がくつきりと写っているのが分かった。

六射目 向こう側の人間 さらに向こう側の…（後書き）

ガンツ生存メモ

佐野

あやや

松原

ヤクザ 死亡

男 A

男 B

男 C

女 A

女 B

残り八人

七射目 正当性より重要なこと（前書き）

ミッション中はあとがきに生存メモを作ることになります。主に登場人物を忘れる私の為にです（笑）

2010年5月19日 再編集

七射目 正当性より重要なこと

整ってきた呼吸は私に意識を与え、意識は私に理解を与え、
理解は私の目から、涙を絞り出す。

人間を意図も容易く殺した。殺すことのできる人間。

「佐野さん……」

パサッ

返り血に染まったパーカーを私に被せる。心なしが目付きが恐い。

「これを着て下さい。直ぐにミッションが始まります。そしたらス
ーッを……」

「なんで?……」

「ん?」

「何で!何で殺したんですか!?!」

手渡されたパーカーを握り締めながら、私は叫ぶ。だけど、どんな
にきつく睨んでも、佐野さんの表情は少しも揺れない。

「……殺す以外に方法がないでしょ。」

私を強姦しようとしたヤクザ、それを射殺した佐野さん。結果的に
助けられたのは私。でも、でも。

「何も……殺すことないでしょう。あんなに酷く。」

「殺すしかないですよ、ああいう輩は。もしアイツがスーツを着たら、どうなります？何人も死にますよ。他の二人にも貴女とおなじ様なことをしますよ。それでもいいと？」

私もそう思う。あの男に武器が渡ったら、きっと大惨事になる。でもそうじゃない。理屈じゃない！

「そういうことじゃないよ！人として、人として、あんなこと間違ってる！」

佐野さんの目が少しだけ動いた。それは僅かだったが、明らかな動揺。

「人としてね……」

「僕には人としての価値観なんか無意味です。なんせ社会には僕の居場所はない！僕はガンツのルールで生きている。それは貴女だって同じ筈だ。」

同じ。私も同じ、ガンツに呼ばれた者。私も同じ人殺し？違う！

「あなたは……！」

ピーロリー♪ピーロリー♪
ピーロリロリリーロー♪

黒い玉からエーデルワイスが流れる。それは始まりの合図、玉が展開し、銃とスーツケースが出てくる。

佐野さんから離れる様に固まった人達も、今は皆ガンツに注目している。

トー。ス星人

特徴 機関車 速い

口癖 〓〓でした

写真には何処かで見たような人面機関車。

『佐野は無駄殺しはやめてくだちい。集めるの大変なのヨ』
「うるさい。」

ガチャ

ガンツの愚痴をはね飛ばすと佐野さんは隣の部屋へと入って行った。
もうすぐ転送が始まる。

ガチャ

むこうの部屋から佐野さんが戻って来た。手には前は使わなかった大きな銃を抱えている。

「佐野さん。」

「僕には、もう意味がないんです。ガンツだけが僕に意味を教えてください。僕が間違っているのならば、貴女が正しさを証明すればいい。ガンツ！僕を最初にしろ。」

佐野さんがガンツの中身に何かをしていると彼の頭上が消え始めた。

「えっ？まつ。待って」

「今回は勝手にやりますけど、部屋に呼ばれる人間が増える時は、敵が強くな…」

「待つて！」

首下まで転送される佐野さんの体、もう声は届かない。

「…置いてかないでよ」

スーツを着て、もの思いにふける。殴られたもあり、体は疲れきっていた。

ヤクザの死体はスーツの力で隅に移動したが、四散した頭部は片付けようがなかった。

佐野さんが正しい。でも何かが違う。分らない。

何が違うの？

殺人は間違っている？

いや違う。もっと別のこと。

「見捨てられたから？…佐野さんに。」

シクシクッ

ハッとした時、部屋の人数は私を入れて四人になっていた。中学
生ぐらいだろうか。女の子が泣いている。その横にはサラリーマン
風の男と顔面を張らせたピザ配達員。

「何やってんだ私。」

佐野さんを守ってもらったの？

子犬みたいって言われるの嫌だったんでしょ？私。

生き残りたいなら、戦わないといけないんだ。私がしっかりしないと、この人達は生き残れない。佐野さんじゃあない。私がやらなきゃ…

「スーツを来てください。」

ガンツの正面に立って、皆に呼びかける。

集まる注目。恥ずかしい。人前に立つのは苦手なんだ。リーダーなんて器じゃない。でもやらないといけない。

「みんな、自分の名前が書いてるケースを持っていて、向こうに転送されたら着て下さい。早く！」

慌てて自分のケースを探す三人を置いて、さっき佐野さんが出てきた部屋に入る。

「これは、佐野さんが使ってた刀。

！ 何？この機械。」

部屋には刀のグリップが何個かと、大きな機械が何台か並んでいる。

「乗り物…みたいだけど。」

例えるなら一輪のバイク、でもそんな物、あり得るの？ガンツならありなのか。

「こうかな？」

座席らしき部分に乗ってみる。乗りごころは悪くないが、一輪なので、どうにもバランスが悪い。

「後ろにもシートがある。一人が操縦で一人が射撃って事かな」

プッ

「あっ」

突然、視界が変わり、自分が外にいることに気づく、波の音から港にいたようだ。乗っていたバイクごと転送されている。戦闘開始。もう戻れない。

「他の人は？」

リーダーを見ると、メンバーは三、二、二で別れたようだ。私の近くに一人いるということになる。

「あっ」

振り向くと声が重なった。隣に一人いた。

固まる二人。

スーツを着かけた配達員。そして、彼の下半身に申し訳なくぶら下がる物を直視してしまう私。

「エッチ…」

乾いた男の声が潮風に流されていった。

七射目 正当性より重要なこと（後書き）

生存メモ

佐野

あやや

松原

リーマン

ユカリン

ちょびひげ

正ちゃん

リエコ

残り八人

八射目 事故死↓爆死↓そして××（前書き）

2010年5月19日 内容を再編集

今では映画の話まで決定しているのにまだ一話すら完結してないヘタレ作者です。それでもこれを読んでくれる方々、ホントにありがとうございます（．．）

八射目 事故死↓爆死↓そして××

「えーっと。アクセルとブレーキは二輪と一緒にだな。なんかバランスが取りにくい。」

ギューン

ドゴーン！

松原君がバイクの試運転をしている間、私はライフル型の銃の射撃練習をする

「引金は二つ引いたら発射。爆発までには時差がある。佐野さんの言ってた通り。そっちはどう！？行けそう？」

向こうの方からターンして戻って来るバイク。どうやら操縦をものにしたようだ

「多分行けますよ。後ろに乗って下さい。」

後ろのシートに乗り込みナビを確認する。私達は八人。敵は五体。

「何処に行きますか？」

「まずはこちらの三人組。スーツを着てない人もいるから急ぎましよう。星人達も近いし、このままだとエリアからじゃうわね。」

「エリア？」

「この四角から出ると死んじゃうの。このナビは君が持ってる。直ぐに行きましょう！」

「了解！」

走り出す車体はあっという間に加速し国道を走る。

「加速も凄いいし、乗りごちもいいんすね。これなら直ぐに追いつけますよ…あれっ？あのっ、これどうしたんすか？点が消えましたけど」

「…反応が消えた？」

動いている3つの点の1つが消える。

つまり、それは一人死んだと言うことだ。間違いなく彼らは星人に襲われている。

「急いで！皆死んじゃう！」

「へい！」

バイクは信号を無視し、加速を続けていく。助けなければ、一人でも多く。

（沼田利恵子）

「利恵子！急げ！追い付かれる」

正ちゃんに引きずられる様にしてアタシは走っていた。脇腹がずきずきと痛い。

「まつ。まってよ。正ちゃん……」

「早くしろよ！殺されちまうぞ。」

あんなこと、信じられない。化物に捕まった男の人は、ぐちゃぐちゃと食べられた。
もし追いつかれたらアタシも食べられる。

「だって、そんなに走れな……」

ヘナヘナと膝まづくアタシ。

「速く立てよ！」

「もう無理。先にいつて……」

優しい正ちゃんならきつと待ってくれるよね。今までそうだったし。

「おっ、俺は、もう知らねえぞ」

えー！？置いていくの？本気なの？こんな危険な所に？

「ひどつ。ちょっと待ってよ！」

「…」

ピンポロパンポン
ピンポロパンポン

「最悪…あんな奴だったなんて。」

ピンポロパンポン
ピンポロパンポン

遠くなっていく正ちゃんを見つめながらアタシは絶望した。せつかくユカリンと約束したのに。

「ユカリン大丈夫かな？」

あの時、バックミラー越しに見えたダンブカー。すっごい衝撃の後であの部屋に座ってたアタシと正ちゃん。その後ユカリンも来て。ヤクザがピザ屋殴りだして、女の人襲って、そして…

ピンポロパンポン
ピンポロパンポン

なんの音なの？ふざけた音。向こうの方から聞こえるけど。

ピンポロパンポン
ピンポロパンポン
ピンポロパンポン
ポンッ！！

突然、正ちゃんの頭が弾けて、彼は静かに倒れた…ように見えた。

「なに？正ちゃん？」

少しだけ息が楽になった私は正ちゃんに近づいていく。

ピンポロパンポン！

ピンポロパンポン！

さっきの変な音。さっきよりも近くで聞こえる。

ピンポロパンポン！

ピンポロパンポン！

近づくにつれて、はつきりと見えてきた正ちゃんには、もう頭がついていない。

ピンポロパンポン！

ピンポロパンポン！

「死んでる？」

ピンポロパンポン！

ピンポロパンポン！

「ねえ。正ちゃん！？生きてるの！？」

ピンポロパンポン！

ピンポロパンポン！

けたたましく鳴り響く音。気が狂いそうになる

「もういや！なんなのよ！正ちゃん！ユカリン！誰か助けてよ！」

ガシッ

「え？」

アタシを握る屈強な腕、貨物車両の巨大な胴体、正面の顔はテレビで見たのと違い、丸い目玉が狂った様にグルグルと回り続けている。

「捕まえたぞ。人間なのでした。」

某ナレーターを彷彿させる穏やかな声も、より不気味に感じるだけ。

「いやあああ！！！！！！！！！！」

「ハンターよ。ドッチから喰われない？頭か？それとも足がいいか？」でした。」

化物！こんな夢。まだ覚めないの？

このままじゃ死んじゃう。あの男の人みたいに？イヤ！嫌よ！誰か！誰か！

「離せつ。離してよ！」

「頭からに決定！！」でした。」

「ああああゝゝ！！正ちゃん！！」

こんなあんまりでしょ？さっきまではユカリンと話してて、ちょっと青春っぽくて。なのに正ちゃんには見捨てられて、こんな怪物に食べられて死んじゃうの？アタシの人生は？こんな嫌よ…嫌だよユカリン。

バキヤッ

「ぐあゝ！腕がゝ！痛いでしたゝ！」

「キヤッ！」

化物に放り投げられた私は、重力に翻弄されながら地面に落下する
ぽすっ

落下の感覚は比較的軟らかな着地に遮断された。

「ナイスキヤッチです！姉さん！」

「いいから走って！ラインを越えないようにね！」

「了解！」

目を開けるとそこには白馬に乗った王子様。ではなくて、茶髪の女の人がいた。

「大丈夫！？痛い所はない。」

セリフは王子様っぽいのね。

「うつ、うつ」

この人、あの部屋でヤクザに襲われてた人…だよな？

「何とか間に合った。しかも何なのアイツ？日本語喋るの？撃って倒すしかないのかしら」

「お姉さん。誰なの？…」

「私？私は白井綾。細かいことは後で話すわ。今は振り落とされないう様に掴まっついて！」

「ゆっ、ゆっ、ゆっ、許さんぞハンター！」でしたっ！」

後ろの方から化物が追いかけてくる。

「来たっ！松原君！加速！加速！」「うわああ！」

一気に加速するバイク（みたいな乗り物）。

「助かった…の？」

アタシは体を包む疲労と、綾さんの温もりの中でゆっくりと目を閉じる

「ちよつと！大丈夫！？」

アタシは大丈夫。お願い。少しだけ、少しだけ眠らせてよ

く白井綾く

グーン！

シュシュシュシュシューポー

夜の街を爆走する私達のバイク（の様な物）。

追ってくるのはトー。ス星人。目が血走り、残った片腕を振り上げて激怒している。

「このっ！このっ！」
ギューンギューン

ドカドカツ

「駄目っ！避けられる」ジグザグに突進してくる星人に狙いが定まらない。加えて伸びてしまった女の子を抱えていればなおさらのことだった

星人の方は手の届く範囲を求めて少しづつ近づいてくる。

「追いつかれるよっ！」

「これ以上スピードでないですよ！」

「どうする…そうだ！トンネル！あのトンネルに入って！」

キキキキッ

「逃がさんぞくでした」

シュシュシュシュシュシュシュポーー

るのがやっとの路地に入ってきた星人。でかすぎる本体は通路に擦れながらも突進し続ける。

「今です！姉さん！」

「これでも避けられる！？」

ギューン

ギューン

ギューン

ギューン
ギューン
ギューン

シュシュシュシュシュポーー

ガッガン！
バリントツ！

壊れていくアスファルトや蛍光灯

しかし列車は勢いを増して追ってくる。

「逃がさんぞ！ハンだだだーでししし」

ドギヤ！ドゴツ！グチュ！

時間差で弾きとんでいくトー。スの顔面を眺めながら、私は勝利の手ごたえを感じていた。

弾ける敵を見つめても、もう吐き気は起こらない。

それは良いこと？

悪いこと？

『意味なんかない』と言った佐野さんの言葉が今なら少しだけわかる気がする。

「やった！やったよ！」

「やりましたね姉さん！」

それでも生きている。私は人を助けることができたのだ。

「ねえ。ところでさ。姉さんって何？」

「あつ。いやなんかカッコ良かったので。駄目でした？」

…まあいいか

「他のメンバーと合流しましょう。」

「へいつ」

夜を駆け抜けるバイク。東のほうの2つ点を目指す。

佐野さん、私も強くなってみたい。

八射目 事故死↓爆死↓そして××（後書き）

ガンツ生存メモ

佐野

あやや

松原

ユカリン

リーマン

ちょびひげ 死亡

正ちゃん 死亡

リエコ

残り5人

九射目 勝手にやるだけ

久しぶりに海をみた。

海は好き。楽しい記憶が一杯あるから。街は嫌い。冷たい記憶が沢山あるから。

「え」と、由可利ちゃんだっけ。君は今いくつなの？」

こんな理解不能な事態の中で、世間話なんてどうかしてると思う。

人の良さそうな笑顔を向けてくるこの男から、なるだけ離れる様に歩きながら私は思った。

私の名前は坂田由可利さかたゆかり

こっちの中年サラリーマンは田代というそつだ。

ヤクザが殺された部屋から個々に移動して、今はとりあえず駅を探している。

「おじさんにも君と同じ位の娘がいるんだ。まあ最近はやど構ってくれないけど。ハハハ。」

「黙ってて」

「はい……」

歩きながらスーツを伸ばしたり摘んだりしてみるが、特に何も起こらない。部屋の女の人は、これを私達に着せようと必死だったけど、特に意味はないの？

どさくさで持つてきた小型の銃。

佐野とか呼ばれてた人がコレでヤクザの男を殺したから持つてきた。もし、私にも使えるなら、撃ってみようかな。

カチッ

引金を引いてみる。

「出ない…」

壊れてるの？

カチッ

もう一度引いてみたがやはり出なかった。

「ねえ。」

利恵子は無事だろうか？部屋では同じだったけど、先に移動してしまっただけだし。念のため持つてきたケータイも全く繋がらなかった。

「ねえ、由可利ちゃん」

「…黙ってて」

馴れ馴れしい呼び方。私はアナタの娘じゃない。

いや…仮に、こんな人の子供だったら、私も――

「やっぱり。由可利ちゃん！何か聞こえるよ！」

？

耳をすましてみると確かに聞こえる音がある。

ポツポツ

これは…汽笛？

シュ…ユシュ…

「此方に来てる？」

おじさんの言う通り、何かがこちらに近づいてきているようだ。

シュシュシュシュシュ

「SLの音みたいだ。おじさん昔好きだったからさ」

「黙って！」

「あつ。ごめん…」

シュシュシュシュシュシュシュ

音は次第に大きくなり、そして…

シュシュシュシュシュシュ！

ギギー！！

「みーつけたでした。」

「ひっ…」

「うわっ！！ばっ…化物！？」

けたたましいブレーキ音と共に現れる巨大な何か。

あんなの見たことない。怪物としか言いようがない。

ソイツは一言で言うならば機関車。けどその車体にはあり得ないパーツが幾つか付いていた。まず全面には不気味な顔。半笑いの口元からはヨダレが酷い。

体は全体がグリーンで塗装されていて、横の巨大な腕は不気味な肌色で覆われている。

「これって、トー。ス…星人？」

「うわっ！？」

おじさんの声に振り向くと後ろにも同じ物が迫っていた。

「はっさみっ打ちでした。」

囲まれた？

あっという間に訪れる絶対絶命の危機。心音は三倍速、冷や汗も止まらない。

殺される！また、死んでしまう。

「逃げなさい。」

「えっ？」

「おじさんが時間を稼ぐから、その間に、君は逃げなさい。」

「だけど……」

真剣なその顔は、さっきまでとは、まるで別人のようだ。不思議と声にも説得力がある。

「おじさんこういうことには慣れてるから。それでも人の親、娘のような子供が死ぬのは見たくないんだよ。大丈夫だから。行きなさい！早く！」

「…はい」

ダダッ

駆け出す足は無情にも高速で動いた。路地を目指して死ぬ気で走った。

「うわわあああ！」

後ろから聞こえてくるのはおじさんの声、必死な声、私はただ泣くことしか出来ない。泣きながら走り続ける。

ポッポ

暫くすると後ろから汽笛の音が聞こえてきた。もう追いついて来たの!?

呼吸が苦しい。必死に足と手を降り続けても、蒸気の音は近づいてくる。

もしかしたらここは地獄なのかもしれない。やっぱりあの時、ダンプカーに轢かれて死んだんだ。

死ぬことってこんなものなんだ。思ってたよりずっと恐い。別に死んでもいいって、ずっと思っていたのに。情けない。

ドキヤッ!!

「うぐっ!...」

背中を突き抜ける衝撃。

撥ね飛ばされた体が駐車場目掛けて突っ込んでいく。

バキヤッ

バキヤッ

ドゴンッ

制御の効かない体は車を三台も潰した後、四台目のフロントガラスにヒビを入れて止まった。背中が熱く、手足は振るえて動かなかった。あんなに弾きとばされたのなんで生きているんだろう。

「おっしやゝ！大人しくなつたぜえゝでした」

「おっ！女じゃん！一口でいいからくれよでした。」

「てめえ。おっさん独り占めしただろうが！でした。次は俺の番だよでした」

彼らの言葉からわかったのは、彼らが人を食べることに、おじさんは助からなかったこと、そして私も助からないことだった。

「とりあえず止め刺しとかねえ？でした」

「あつ？まあいいけど…これは俺のだからなゝでした」

「わかったから早くやれよでした」

トー。スが巨大腕を振り上げる。醜い筋肉が盛り上がり、目は最大まで血走っている。両手で叩き潰す気なんだろう。もしかしたら次も生きているかも知れない。そうやってずっと死ねないで苦しみだけが続くという地獄なのかもなんて…

「せーのっ！」

ゴキヤ！！

？…どうなってるんだろう。私はまだ生きていた。それどこれか痛みがない。

目をゆっくりと開けると怪物の腕は宙に止まっていた。まるで見えない壁が私と星人の間に立っているような感じだ。

「オイオイ…冗談やめろよ。フェイントでした？」

「ばかつ！ちげえよでした。なんだよ…コレ？…手が動かねえでした」

バチバチバチツ

まるで空気がよどんでるように、火花と共に現れた男は、私と同じスーツを着ていた。

「佐…野？」ヤクザ殺しの男が怪物の腕をつけとめている。

「なんで…助けるの」

痛みに小さく咳き込みながらの質問。私にはそれが限界だった。

「…」

佐野は小刻みに震えながらトー。スの怪力に抵抗している。

佐野のスーツは何本もの血管が浮き出っていて、部屋で見たときよりも全身が二回り程はでかくなっていた。これがスーツの力なのだろうか？

「くっ…僕は…勝手に」

「あがが…やめろでしたあああ!!」

ブチブチという何かの切れる音と共にトー。スの顔が歪んでいく。

佐野のスーツほうからはキューンという音が洩れてきている。

「勝手に…やってるだけだあああ!!」

ゴキユ!!

「おぐあああ!!」

鈍い音と共に付け根から先をブラリと垂れらす腕。骨をはずしたのだろうか？その疑問よりも先に佐野は腰から引き抜いた小型銃をトー。スの顔面に当てていた。

「やめでぐれでじっ」

ギューンギューンギューンギューン

トー。スが喋りきる前に銃は連続で発射されていた。

「ぶっ…ああああ!!」

ドブアア!ボチュツ　!グチャ!ゴキユ!

目玉を高く打ち上げながら横転していくト。ス。

「走れっ!」

私の手を引いて走り出す佐野。

「逃げるの?」

「奴らはかなり強い。まともにやったらスーツが持たない。」

シュシュシュシュ

「まてゝでした!」

追いかけてくるもう一体のトーマス。

仲間を殺され怒っているのか、その目はグルグルと勢いよく回っている。

「一二の三で跳ぶ。」

「えっ?」

「いち」

「二の」

掴みかかろうとするトーマス。腕を此方に伸ばしてくる。

「さんっ！」

「うっ、うそ？」

まるでスローモーションの様に私の体は宙にういた。

そのままビルの上まで跳びあがる。

「何これ…わけがわからない」

「これもスーツの力。生き残りたいなら覚えておけばいい。」

生き残る？そんなこと考えてもみなかった。こんな地獄の中で生き残ろうとしてる人間がいるなんてことは…。この男はなんなんだろう？ヤクザを殺したり、私を助けたり、行動に一貫性が全くない。

「君、名前は？」

今度はただ名前を聞くだけ…ほんとに変な男。

「坂田…由可利」

滑空するように着地した私達。

もしここが地獄でなく、私がまだ生きているのならば、もし本当に生き残れたのなら、こんどは自由に生きてみたい。

私はそう思った。

九射目 勝手にやるだけ（後書き）

ガンツ生存メモ

佐野

あやや

松原

男^{リマン} 田代 死亡

女（中学生） 由可利

正ちゃん

みつ子

男 死亡

残り六人

十射目 それでも殺るだけ（前書き）

ガンツ映画化おめでとうございます（．．）

生身の人間がスーツ着てるのは少し無理がある気もしますが、特注品で無茶高いらしいですね。

競売とかでもっと高く取引されるようになるのかな？

何にせよ。いつも見てくださっている皆さん、亀より遅い更新ですが、よろしく願います。

十射目 それでも殺るだけ

逃げ込んだ駐車場のなかは思っていたより広く、ちらつく蛍光灯は、力尽きながらも僕を必死に迎えてくれていた。

「どっかに隠れたら？まあ好きにしなよ。」

少女にそう言いながら、スーツの状況を確認める。今のところ、そこまで負荷は掛かっていないようだが、やはり無理は禁物だろう。全くどうかしてる。今回は誰も助けまいと決めていた。白井さんに言いきつておいて、この様は情けない。

それでも状況は悪くはない。ここまでの観察で敵の攻撃方法もはっきりしてきているからだ。トー。ス達は動きは早い、突進や格闘主体、小回りがきかないぶん隙を突きやすいし、スーツを一撃を破壊する様な攻撃は持っていないようだ。

なるだけ一対一に持ち込み、冷静に対処すればそこまで強い相手ではない。

ギューン

ドンッ

半壊させた自販機の中から、スポーツドリンクを選んであげた。もう慣れてしまったが、備え付けの警報装置ごと破壊するには少しだけコツがいる。

「飲みたきゃ飲んだらいい」

床に散らばるジュースを指差しながら、車のボンネットに座った。少女は、車の隅に小さくうずくまっている。名前は坂田だったか、さつきから一言も喋らない。走り続けて疲れているようだが、取り乱した様子はなく、何かを考えるようにずっとうつつ向いていた。

「…」

コクリと小さく頷いて、そこからオレンジジュースを拾い上げる。

「…ありがとう」

「別に…盗品だし。」

感謝されるいわれもない。

「さつき、助けてくれた…」

…どうやら話がずれていたようだ。

「それは君の勘違い。僕は点数が欲しいだけ。別に助けた訳なんかじゃないから」

「点数？」

「化け物の点数。殺したら貰える。まあ意味わかんないだろうけど。」

「殺す…」

少女はまた黙りこんだ。
なんだか変な子だ。普通、これぐらいの年の子は、もっとうるさいもんだ。

「佐野は…」

…なんで呼び捨て？

「なんだよ？」

「ヤクザ…殺した。」

「…」

ヤクザ者を射撃したときの記憶が巡った。といっても殺す事に違和感は無かった。何の感情も湧かなかったし、もちろん後悔もしていない。

「どうして？」

理由は…少しはあったのかもしれない。

確かにあの時、僕は自分の中に『怒り』を感じていたのだから。

「殺したかったからさ。僕が殺したいやつは殺す。ヤクザでも、女でも、子どもでも、ね」

「そうじゃなくて」

「？」

「なんで撃てたの？…コレ、発射出来ない。壊れてる」

さつきからどうも話が噛み合っていない。つまり、この娘が知りた
いのはヤクザを殺した理由ではなくて、銃が正常に作動したことに
ついてらしい。

ほんとに変わった女だ。

「…引金は、二つとも引くんだよ。そしたら撃てる」

「二つとも…。そうか。この下のも引くのね」そういつて少女は、
手の平の拳銃を見つめながら呟いた。

初心者の娘が銃を持って来ているとは思わなかった。白井さんに渡
されたのだろうか？

だが彼女は撃ち方を知っていたはずなので、今回、銃を持って来た
のは、この娘の判断と言うことになるのか。

「なんで、撃ちたいの？」

「えっ？」

銃を持ってきたことに少しだけ興味がわいた。

「君、何かを撃つ気だろ？何となくだけど、殺したい奴でもいるの
？」

「……………か、家族」

ほう。家族とはね。僕が言うのも何だが、なかなかぶっ飛んだ返答
だ。それとも何か、家庭に問題でもあるのか？

「そうなんだ」

「…驚かないのね」今更だろ。僕は既に人殺しなわけだし。

「君が誰を撃とうと僕には関係ない。もちろん僕を狙えば殺すけどね」

「…そう、そうよね」

「何にせよ。撃つなら、銃は隠さなきゃいけないよ。布かなんかにくるんで撃ちな。」

「…」

少女はまた黙りこんでしまう。迷っているのか、まあ当然と言えば当然。子どもなのだから。

「…家族を殺したりしたら、やっぱり許されないのかな」

独り言の様に呟く言葉。遠くの方からは汽笛の音がする。さっきの奴が追いついて来ているのだろう。

「誰に許して貰う気なんだ？」

「警察とか、世間とか」

肩幅ほどある巨大な銃を抱え直しながら、僕は尋ねた。

「仮に君が家族を殺したとして、

世間が許せば君の行為は許されるものなのか？」

「そうじゃない。常識で考えて……」

「常識？それはここでは通用しない。僕がヤクザを殺したことも、世間が認めれば正しかったことになるの？そして、認められないから悪なのか？」

「それは……」

「君の重んじる道徳とやらも、所詮は誰かのあとづけなんだよ。他人に許しを乞うんでなく。少しは自分で考えるべきじゃないのか？」

「私だって！……」

「隠れる。」

ガタンッ

入口の方から何かが入ってきた。少女と共に車の下に隠れるシュシュシュ……

蒸気の音が近づいてくる。ブツブツと気味の悪い声も聞こえる。僕らを探しているのだろう。

「コレ、持ってみな。」

「えっ！？」

差し出された巨大な銃に、流石のこの娘も驚きを隠せないようだ。

「静かに…奴にばれる」

「ん？そこにいるのかハンタ〜でした。」

気色の悪い顔が、車の間からニユツと出てきた。まだ此方の正確な位置までは気づいてないらしい。目をギョロつかせて辺りを探っている。

「この銃で練習させてあげる。構えてみて」

上半身を車から出して構えを取らせる。

「まず狙いをつける。ここにレントゲンが映るだろう。見えるね。」

「うん。」

「次に、先に上のトリガーを引く。そうすればロックオンされる。画面が変わったのが分かる？」

「うん。」

少女の声は少しずつ小さくなった。不安・恐怖・緊張の入り交じった表情

「最後に下を引いて発射だ。気づかれる前にやれ。」

「…」

今や少女の額からは汗が伝い、顔色がじわじわと青くなっていく。後は引くだけだ。それは一つの決断とも言える選択なのだ。

「早く撃たなきゃ気づかれる。そうすれば殺られるのは君だ。チャンスは今だ。」

「わかってる！焦らせないでよ！」

ギューン

「あっ……」

力んだ拍子に引いてしまったのだろう。銃は、他の銃とは比べ物にならない光と音を発して発射された。

「見つけたぞ！ハンター！でした」

此方に気付いたトーマスはニヤリと笑った。しかし勝負は既に決していた。この銃は百点の褒美として与えられる、他とは比較できない必殺兵器なのだ。当たれば逃げられない。

ズドン！

空気が歪む音が響き、その一瞬で、トーマスは頭部を失った。地面は大きく凹み、そこに奴の頭部だった筈の物が液体とかし濁って波打っていた。

「どう……なったの？」

「頭を圧縮した。潰れたのさ。死んだよ。」

「死んだ。」

ガッシャ

横倒しになった銃を拾い上げ、僕は大きく背伸びをした。

ナビで確認すると、敵はあと2体。そのうちの1体は近くに向かって来ていた。もう一体は開始からずっと動いていない。

「うつ、うつつ！」

少女はまだ、車の下でうずくまっていた。吐き気を堪えているのだろう。小刻みに震えている。

「君の銃だと、人の一部を弾き飛ばすくらいだね。まあ、死体が残っても凶器の特定は無理だろうし」

「なんだか寒い…。少しもスッキリしない」

「慣れれば段々感じなくなる。」

「私は…やらなくちゃ……」

「やるにしても、やらないにしても自分で決めるんだね。僕はもう行くから」

何か、言いたそうな少女を残して、僕は出口に向かって歩きだした。

時間も無駄に使ってしまったし、急いで残りを片づけなければいけない。

「佐野は」

かすれた声で少女が呼びかけてきた。もう振り返らずに足だけを止める。

「殺すのは楽しいの？」

殺すのが？

ははっ。そんなの当たり前じゃないか。

「殺して楽しかった事など一度もない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0630j/>

GANTZ ～二つの引金～

2010年10月15日22時33分発行